

公益財団法人鳥取県文化振興財団
平成27年度 業績評価（文化芸術事業）
まとめ
（平成27年4月～平成28年3月）

1 はじめに

平成26年度より、第3期指定管理期間の文化芸術事業推進コンセプトとして、「ARTS FOR EVERYONE～アートでつながる、心うるおう～」を掲げ、県民へ国内外の質の高い舞台公演の鑑賞機会の提供や、県内の文化活動者と共に創る創造的な舞台作品の企画制作、またアウトリーチ活動を通じて、次世代を担う若者の育成と文化芸術への参画を目的とした事業を企画・選定した。第1期および第2期の指定管理期間での成果と課題を踏まえ、第3期2年目である平成27年度は鑑賞型事業9本と育成・創造型事業6本を実施し、多くの県民に文化芸術に触れる機会を提供した。

2 概要

(1) 平成27年度の特徴

ア 様々なジャンルの実施による幅広い年代層の集客と新規鑑賞者の開拓

公益財団法人として偏りのない事業展開が必要とされることから、様々なジャンルの公演を実施し、公演ごとの戦略に基づき、若年層から高齢者まで幅広い鑑賞者の掘り起こしを行っている。全体平均として入場者率は、69%（前年度73%）、入場目標達成率は、90%（前年度88%）顧客満足率は、85%（前年度86%）と前年度に引き続き高実績であった。入場目標達成率では、特に「ザ・グレン・ミラーオーケストラ」が133%、「ブロッケン妖怪」が124%と高かった。また、過去3年間における同ジャンルの鑑賞数（≒新規鑑賞者割合）は41%（前年度35%）であり、新規鑑賞者開拓は進んでいると言える。あわせて、ダブルオーケストラプレミアムウィークとして実施した「NHK交響楽団演奏会」「ロシア国立交響楽団」は、潜在的鑑賞者の掘り起こしにつながった。

イ 収支比率に関して

全体平均として86%（前年度81%）であり、「ザ・グレン・ミラーオーケストラ」1事業のみ（前年度4事業）141%とプラスとなった。さらに、他5事業が80%以上となり、想定内と言える。低かったものは、「人形劇 お花のハナックの物語」が29%であったが、親子向け事業であることから高額なチケット料金設定が困難であり、このような事業については、これまで企画選定時に論議されているように、収支面に縛られない事の共通理解が必要な事業と言える。また、外資導入については、「NHK交響楽団演奏会」「人形浄瑠璃 文楽」の2事業であり、今後の財源が厳しい事が想定される為、更に助成金等の活用を進める事が必要とされる。

ウ 事業と財団友の会プレミアム会員増への関連性

平成27年度においての大きな変化は、前年度の西部地区に続き中部地区の会員数の大幅な増加（前年度比2倍）が見られた。その要因としては、大型事業の実施と著名な役者、アーティストの出演に連鎖すると言える。あわせて、会員先行予約前に倉吉未来中心が発行した中部地区向けの新聞折り込みの効果が非常に高いものであった。

<参考> 友の会プレミアム会員数近年の推移

H28年3月末現在

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27
会員数	420	420	450	520	817	924
	地区別会員数					
	東部 286名	中部 313名	西部 272名	県外 53名	合計 924名	

※平成26年度よりメール会員制度を新設し現在の会員数は593名（前年度510名）

エ 鑑賞事業の枠を超えた取り組みについて

「岡本知高」公演では、地元の山陰少年少女合唱団リトルフェニックスとの一部共演があり、その合唱レベルの高さは素晴らしく、来場者アンケートからも読み取れた。また、「ザ・グレン・ミラーオーケストラ」公演では、鳥取県中学生選抜バンドによるオープニングアクトを実施し、公演のメンバーとのセッションも行うことで、若年層へ本物の舞台芸術の素晴らしさや演奏の楽しさを伝えた。このことについては、アンケートより、一部否定的な意見も頂戴し、その内容、時間配分については、今後検討する事が必要だが、多くは鳥取県の次世代を担う若者への期待感を持ち、温かく見守るメッセージがほとんどであった。このような事業展開は、民間では実施が困難な事から、内容を十分に検討した上で今後も実施の可能性を慎重に探っていくべきと言える。

オ 他の関連機関との共催について

本年度も、県内の文化施設、マスコミ等と共催し、より強化した体制で広域に事業展開を行った。ホール連携として特定非営利活動法人 花本美雄文化振興会(大野雄二&ルパンティック・ファイヴジャズライブ)、(一財)米子市文化財団 2事業(岡本知高、人形浄瑠璃 文楽)、(株)山陰放送 2事業(岡本知高、人形浄瑠璃 文楽)、(株)新日本海新聞社(ザ・グレン・ミラーオーケストラ)と共催で実施したことで、ネットワークの構築と各連携先の強みを生かした広報による集客につなげた。

カ 新たな取り組みについて

公的機関が担う役割として、何らかの事情によりホールに足を運ぶ事ができない方への配慮の観点から、試験的に本年度初めて東部地区の児童養護施設の子どもたち(2施設60名)を招待し(大野雄二&ルパンティック・ファイヴジャズライブ)、鑑賞機会の提供を行った。次年度以降は中部、西部へも同様に実施を行う予定である。

(2) 育成・創造型事業について

第3期指定管理期間の育成・創造型事業のメイン的事業でもある「プロデュース創作公演 邦楽賛歌」については、昨年度の準備年から継続し、地元の実績のある邦楽演奏家・若手の演奏家、地元出身の若手プロの演奏家、そして国内外で実績のある招聘したアーティストの参加による構成で、今までにない斬新なスタイルで邦楽の持つ古典的な素晴らしさとその可能性を前面に出したレベルの高い創造作品となった。邦楽関係では、一般的に500名位とされる集客も、約1,000名と多くの来場者の評価も高く、今後も同様な作品創りを望む声も多く聞かれた。

若年層の育成を目的とした「高校生のためのコミュニケーション事業」、「とっとりの芸術宅配便」「鳥取ブラスアカデミー事業」では、昨年度に引き続き、多くの参加者に対し体験機会の提供を行った。「鳥取県青少年郷土芸能の祭典」では、事前に郷土芸能関係者との意見交換を行うなど、地元関係者とのネットワークの強化を目指し、長期に捉えた郷土芸能の継承に努めた。「鳥取県クラシックアーティストオーディション」については、NHK交響楽団監修の下、新たな若手アーティストの発掘とレベルアップを図り、オーディションにおいてピアノ2名、弦楽器1名を発掘し、受賞者に対し、平成28年度支援予定としている。

(3) 量的成果実績

※別紙参照

(4) 外部評価からの課題点についての整理とまとめ

ア 事業内容に関して

主催事業の考え方として、公的機関が行うべき事業は「文化芸術に親しむことで豊かな人間性を育む」といった教育的な要素や、「心の安らぎや明日への生活意欲・活力につながる」といった社会的要素などを指すものであるべきであり、高い集客率や収益率に拘らず、「県民に本当に喜ばれるもの」であることが更に求められている。また財団事業は、「財団主催の事業であれば間違いない」「財団でしかできない」というブランド的な役割を担うわけであり、現状を保持しながら今後も更に様々な事業を展開していくことを期待するというご意見をいただいている。

イ 集客等に関して

各事業とも販売促進については戦略的な検討がなされており、一定の評価をいただいている。米子市での開催が20年ぶりとなった「人形浄瑠璃 文楽」については、古典芸能は数年毎に開催が無ければその継承もできなく、今後の集客にも影響があるとのことご意見をいただいた。

その他、多くの事業で学生への鑑賞を促す中、一部の公演では専用席（特別価格）を設定し、今後も育成面から学生に対しての招待、特別価格設定を含め、ターゲットを明確にした若年層への配慮を望む声もいただいた。

一方、友の会会員向けへの特別企画としてバックステージツアーを実施したように、顧客に対して鑑賞のみに止まらず、鑑賞後のフォローによるインセンティブ的な考え方が顧客の定着化と拡がりを生むことから、引き続き多様な顧客開拓を実施する予定である。

ウ 親子向け事業に関して

親子向け事業に関しては、企画検討時において様々な意見をいただき選定が難しいところである。「人形劇 お花のハナックの物語」では、入場率の低さを指摘するご意見があったが、子どもがより舞台を身近に感じられる工夫があり、作品の質も担保されたものであり、今後もこのように「子どもに本物を観せる」事が望まれるというご意見があった。また、一方、財団としてホールへ初めて足を運ぶ親子に対して、劇場の楽しみ方や、マナーなどを伝えるなど親子向け事業の組み立てを確立させることについてご指摘いただいた事については、今後検討を進める。

エ 会場選定に関して

各事業については、その内容と特性、ならびに収支面も含めて様々な要因から検討し決定しているが、一部の会場においては会館設備等の課題を指摘されている。その多くは、昨年度もあったが、米子市公会堂のトイレ数の少なさであった。本年度は更に高齢者に対しての客席への動線と席表示のわかり辛さが指摘された。公演により高齢者が多く想定できる場合は、案内係の増員やシルバー席の設定など、今後運用面の強化を図ることで一定の改善へつなげる予定である。

また、事業と直接的な関係はないが、倉吉未来中心については、県外客が想定できる事業時は、夜間でも館内の売店を営業させ官民連携することで地域振興につながるのでは、とのことご意見をいただいているので業者と協議する予定である。

オ 育成・創造型事業に関して

6本の事業に対して寄せられた主な意見は、地元の活動者との連携推進と強化推進、高いレベルでの作品創造に対する期待感、将来を見据えた若年層への様々なジャンルでの育成強化であり、当財団が推進する方向性とほぼ一致していた。各事業で異なるものの、鑑賞型事業と比較し、その調整と実施まで時間数、業務量共に大であるが、短期的な成果に頼らず明確な目的、高い目標を持ち様々な視点からの仕掛け作りを行い、事業の意義や役割につなげ、公益財団法人として掲げた目的を発展させる事が求められている。